

織豊期のキリスト教用語

The Christian Words in the Days of Oda-Toyotomi

新 谷 光 二
Koji Atarashiya

ABSTRACT

The age of Oda-Toyotomi was from 1534A.D. in which Nobunaga Oda was born, to 1598A.D. in which Hideyoshi Toyotomi died. In that age Christian words of Latin and Portuguese written in Japanese katakana were directly used. Christian peoples were called 'Kirisitan' and a non-Christian like a Buddhist was called 'Zenchoyo' etc.

Through such words we know the thoughts of Portugal missionaries. In this paper especially the words of the God 'Deusu' and a love 'Taixet(Taisetsu)' were discussed.

Key Words: Japanese-Christian words, the age of Oda-Toyotomi, Kirisitan, Portugal, God, love

I はじめに

織田信長、豊臣秀吉の時期を信長の生年と秀吉の没年で示せば1534年から1598年までであり、この間のフランシスコ・ザビエルの来日は1549年であった。イエズス会を代表するザビエルはラテン語の聖書と日本語訳のマタイ福音書の一部を持参したと言われている¹⁾。しかし、残念ながらこの翻訳書は現存しない。また1613年には邦訳新約全書の刊行がなされたと言われる¹⁾が、定かではない。おそらくは漢文体のものと考えられる。従って、キリスト教伝来初期における聖書の訳業に基づくキリスト教用語は必ずしも明らかではない。ただ多くのキリシタン文書などによって知られるのみである。

一方、この時期のキリスト教用語を知る一つの手段として、日本語ポルトガル語辞典(1603)がある²⁾。これは日本イエズス会のパーデレ(司祭、神父)とイルマン(宣教師)達によって長崎コレジオ(学林・大学)において編纂さ

れたポルトガル語による説明が付された日本語辞典である。勿論キリシタン文書にも出典を求めている。この辞書は日本語をポルトガル字母で表記するに当たり日本の現代仮名遣いに近い実音主義が用いられているため、話し言葉の実相が分かることでも注目されている。また、主として畿内、九州ではあるが、方言が収録されていてこの点でも興味深い。近年に到り、これは邦訳日葡辞書(1980)として岩波から出版され、日本語で読めるようになった(以下日葡と記す)³⁾。

この時期のキリスト教用語を通じポルトガルの宣教師たちの考え方を知る事は大変興味深い。その上、日葡からキリスト教の伝来以来の基本信条を学ぶことも大変意味のあることと思われる。

なお、キリスト教用語が聖書の翻訳によって定められるのは明治期となって、ブラウン、ヘボンらの訳業を通してである。

II 仮名書きキリスト教用語

日葡からポルトガル語をそのまま用いたキリスト教用語を抄録してその代表例の一部を表1に示した。ポルトガル語語彙と今日用いられている同義の日本語語彙をも示してある。

表1 仮名書きキリスト教用語

キリシト	Christo	キリスト
ゼズーキリシト	Iesu Christo	イエズス・キリスト
ナタル	Natal	クリスマス
キリシタン	christãos	キリスト教徒
デウス	Deos	神
スピリトサント	spirito santo	聖霊
バラクレイト	paraclete	助け主
ペンテコステ	Pentecoste	聖霊降臨節
チリンダアデ	trindade	三位一体
アポストロ	apostolos	使徒
エスキツラ	Escritura	聖書
インカルナサン	incarnação	受肉
クルス	cruz	十字架
レスレイサン	resurreição	復活
バスクワ	Pascoa	復活節
バウチズモ	bautismo	洗礼
インダルゲンシャ	indulgença	贖宥
ポロビデンシャ	porouidência	摂理
ベンサン	benção	祝祷
オラシヨ	oracio	祈り
コンタ・ド・ロザリオ	conta do rosario	ロザリオの祈り
イムノ	hymno	讃美歌
ミゼリコルジア	misericórdia	慈悲
イゲレジャ	igreja	教会
アドロ	adro	墓地
カペレン	capelão	司祭
バアデレ	padre	司祭、神父
バテレン	〃	伴天連
イルマン	irmão	宣教師
パライズ	paraiso	天国
アンジョ	anjo	天使
インフェルノ	inferno	地獄
イドロ	idoro	偶像
ゼンチヨ	gentio	異教徒
コレジオ	colegio	学林
セミナリオ	seminario	神学校

これから分かるようにキリスト教用語はこの時代ラテン語、ポルトガル語が用いられキリシタン（キリスト教徒）のごとく片仮名書きで用いられた。日本イエズス会は仏教や神道をゼンチヨ（異教徒）の業として排斥する傾向にあった。そのため日本語の語彙で当時語義が確定されており、後にキリスト教の教会でも同一の語彙が用いられるようになった用語も出来るだけ原語を用いキリスト教の教義を保とうとしたものと考えられる（例えば、墓地や天国、地獄など）。しかし佛教や神道の宗教用語でも一般化されたものはイゲレジャ（教会）でも用いられた。勿論イゲレジャ独特の語彙も生まれた。なお儒教に対しては概ね寛容であったと思われる。これは儒教用語がキリスト教用語として用いられたことから明らかである（例えば後述の「仁」についての解説など）。聖書の部分訳は日本語に先立ち中国語に翻訳され、その訳語が儒教に基づくものも多く、それが日本でも通用したことにも起因すると思われる。

III カミ（神）を巡る語彙

カミ（神）は日本のゼンチヨが尊崇するものだとしてキリシタンはデウスを用いた。今日やハウエの訳語として「主」、Godのそれに「神」が用いられているが、キリシタンの時代は日本語の「神」はキリスト教の神とは似ても似つかぬものと理解されたのであった。神をCamisと表記し、これは複数形であり、唯一神とは考えられていない。一方で、日本語ではテントウ（天道）を用いるのが普通になった。日葡では日本人一般には天道は天の道以外の意味はないとされる。今日でも「お天道様」は太陽を意味する。またテンソン（天尊）テンテイ（天帝）がデウスの意味で用いられ、文章用語としてはテンシュ（天主）を使ったと述べている。これは「在天の主」であってデウスに近い意味と理解された。「天主教」などに見られる如くカソリック

の聖書翻訳ではこの「天主」が用いられ、「神」を最初に用いたのはプロテスタントであった。テン（天）は広くデウスに連なる意味を持ち、テンカンワタクシナシ（天鑑私無し）はゼウスは人によって分け隔てなく公正に総てをご覧になるという意味とし、テンメイヲソムク（天命を背く）はデウスの戒めを破る意味で用いられた。勿論天及び天を含む語彙は中国語の借用である。創造主はゴサクシャ（御作者）とし、イゲレジャ独特の語としている。ツクリヌシ（造り主）の語彙はあげていない。

日葡は日本人が救霊のことをこいねがうイドロ（偶像）としてホトケ（佛・釈迦）には注目するが、ミコト（尊）には意を用いない。

因みに印欧比較言語学ではDeus(Zeus)は「輝き、天空」に語源を持ち、Godは「呼び出す、すなわち祈り」に語源を持つ⁴⁾。ユーラシア比較言語学⁵⁾（拙論をもって嚆矢とする）ではカミは死者の霊の語源をもち、万葉集では虎というカミとか、大口のマカミ（狼）とか人間に害を与える存在としても現れる。19世紀に至りGodが「神」と翻訳されたことから語義に変化を生じ神の概念も新たな意味に定着したが、拙論⁵⁾によれば「尊」が「祈り」に語源を持ち、Godの意味内容に近い。日葡はミコトノリ（詔）を見出し語にしておりながらミコト+ノリとは理解できなかったものと思考する。チリンダアデ（三位一体）に基づく「聖霊・神の霊」をイゲレジャでどのような日本語語彙を用いたか定かではないが、レイ（霊）は死者の霊であると日葡は定義しながら、一方でレイジン（霊神）を或る神の霊とし、レイジョウ（霊場）をイゲレジャの如き神聖な所と説明している。これは「霊」に死者の霊以外の意味を認めている証拠である。特に、アンジョ（天使）などの知恵をレイチ（霊知）としている。これは聖霊の意味に近い。原語では、スピリツ（霊）といい、スピリトサント（聖霊）といった。また使徒言行

録に表われる聖霊はバラクレイト（助け主）とあった。

イノリ（祈り）も日葡ではイドロの祈祷とし、祈祷や呪術をもって呪う意味とする。信仰と敬虔の念で行う祈祷はキネン（折念）であるとする。更にトナエ（唱え）を今日の祈りとしている。クルスノモンヲトナユル（クルスの文を唱ゆる）は十字をきることを、コンタナドヲトナユル[コンタ（ロザリオの祈り）等を唱ゆる]は天使祝詞等を唱えた数を珠によって数えることを意味した。原語ではオラショ（祈り）である。

IV アイ（愛）を巡る語彙

キリスト教における重要な教理の一つであるアイ（愛）を日葡では見出し語としておらず、コイ（恋）もよこしまな慕情としキリシタンの宗教的立場から肉欲の禁を説いている。今日のアイ（愛）一般はタイセツ（大切）を当てていて興味深い。タイセツニモユル（大切に燃ゆる）、タイセツヲツクス（大切を尽くす）等の用例を挙げている。今日ならば「愛に燃える」、「愛を尽くす」と用いて問題はない。また、オボシメス（思し召す）を愛する意味とし、ゼンニンチハセカイヲデウスニオボシメシカエラレタ（善人たちは世界をデウスに思し召し換えられた）の文例をあげ、サントス（聖人）たちは現世よりもデウスを愛されたという意味だとしている。一方前述の如く儒教の教えであるジン（仁）に理解をよせ、「自らを忘れ、他を愛して、危うきを救い、極まれるを助け、総て物に情を先とし、事に触れて憐れみの心の有ること」と解説している。これはイエズスの愛に通じる。また、仏教用語でもあるジヒ（慈悲）をポルトガル語のミゼリコルジア（慈悲）に当てジヒヤ（慈悲家）は修道院付属の救護所、ジヒバコ（慈悲箱）は献金箱の意であると見える。献金の仕方に触れて、慈悲箱（これは神社仏閣における賽銭箱に類似のものであろう）に「金を撒き入

れる」とあり、今日このような献金をなしているかと反省させられる。レプトンの譬に従っておれば問題はないが、「撒き入れる」は多額を連想させるからである。イゲレジャに寄付をすることはキシシ（寄進）と呼びそれをホウモツ（捧物）ともいう。イドロに対しては奉加であり、賽銭などはゼンチョの言葉とされている。献金は「割り当て」を戒めて、「賽」の意味が理解されるなど自発意志と感謝を旨としたであろうと考えられる。

V その他の基本用語

日葡は教義をテキデン（的伝）とよび、アポストロ（使徒）たちがキリストから受けた教え、キリシタンがアポストロから授けられた教えと説明している。罪の赦しは今日同様スクイ（救い）でありユウメン（宥免）も見える。イゲレジャのインダルゲンシャ（贖宥）のような誰にでも与えられるものではない特別の大きな赦免をヒジョウノタイシャ（非常の大赦）と呼ぶとしている。

パライズ（天国）はゴクラク（極楽）といい、ゴショウゼンショ（後生善所）といって死後の住処とし、パライズの歡喜をジョウラクガジョウ（常楽我浄）とするなど仏教用語の一般的なものが借用されたことは前述した。

インフェルノ（地獄）はジゴク（地獄）、ナイリ（泥犁）と呼んだ。クワウセン（黄泉）はゼンチョの考えている地下にある死んだ者の魂の行きつく所だとされる。ヨミ（黄泉）は見出し語としていないが、ヨミガエリ（蘇り）は生き返ることと説明している。これもヨミ+カエリとは理解されていなかったものと考えられる。原語ではレスレイサン（復活）であり、バスクワ（復活節）が用いられた。日葡には日本語の「復活」や「復活節」をあげておらず、いずれも後代の語彙である。

イエズスの生誕を巡って、タクタイ（托胎）

をあげ、托身する即ちある人の胎内で人間の形をとると説明して、例文ゼズキリシトサンタマリアノゴタイナイニゴタクタイナサレタ（ゼズキリシト聖マリアの御胎内に御托胎なされた）によって、我らの主キリシトに適用できると述べている。原語ではインカルナサン（受肉）である。

英語の音訳である「クリスマス」は日本では明治初年になって初めて文献に現れる言葉であって、イゲレジャではナタル（クリスマス）といわれた⁶⁾。ナタルはⅡ編讃美歌116番の歌詞ノエルとともに同じラテン語からの派生語彙であって前者はポルトガル語、後者はフランス語である。印欧語根*gen-に遡ることが出来て、いずれも「誕生」の意味である。*gen-は英語kingを派生させていてナタルやノエルには貴人の生誕の意味が見え隠れする。

復活節、クリスマスと並ぶキリスト教の祝祭である聖霊降臨節はペンテコステを用い、今日と変わりはない。

また、ドミニカ（日曜日）、ドミンゴ（主日）が用いられた。日曜日は主の日の意味である。

VI 考察とまとめ

日本とポルトガルとの交流は、「種子島」の名で知られる鉄砲の伝来となったポルトガル人の漂着に始まる（1543）。その後ザビエルの来日を機にキリスト教の日本布教がイエズス会によって行われた。ザビエルの布教活動は鹿児島島の島津貴久、周防の大内義隆、後にキリシタン大名となる豊後の大友宗麟などの庇護のもとになされ、キリシタンは1551年には鹿児島100名、平戸100名、山口500名を数え、さらに、2年後には計4000名に達した⁷⁾。この宣教において重要なことはキリスト教の信条を日本語で伝える必要に迫られたことであった。この点でポルトガルの宣教師たちの苦労は察するにあまりあるが、短時日のうちに多数の信徒を得た実績か

らは日本語を十分身につけたものと考えられる。それだけでは無く、日本語語彙の微妙なニュアンスをも理解するまでになった。それは前述のように、日本語の「神」の意味内容がキリスト教の「父なる神」に相応しくないと判断したことやポルトガル語のamor（愛）が日本語の「愛」ではなく、「大切」と訳されたことなどから知られる。

日本語の「神」は「ヤオヨロズの神」であり、必ずしも前述のように「天」と直結するものではない。この点ではDeusも「パンテオンの主神」であり、「ヤハウへ」とは異なるのだが、前述の語源からも分かるように「天」と関わる語意を持っていて「父なる神・天の父」に近い。

日本語の「愛」はエロスであり、「大切」はアガペーに近い。「切」の語意は「ひたすら、懇ろ、親切、切々」などであり、「大切」は「差し迫ってなすべきこと」と理解された。前述の「仁」の意味内容に近いのも「大切」の方である。これに関連して日葡ではコイ（恋）の用例として、ヒトヲコイテワルイ（人を恋ひては悪い）をあげて、前述のように情欲的に人を愛することは悪いことであると説明している。なお、血族の者を愛することやみだらな慕情にふれ、そのようなことがあったことを示している。特に、ニャクダウ（若道）、ナンショク（男色）の禁を解き、これらは口にもすべからざる語彙としている。従って、「愛」も同断とされ、イゲレジャでは用いられなかった理由が分かる。

以上の如き日本語の理解があつてこそ、宣教が著しく進展したのであった。その努力の結果が日葡に集大成されており、日葡後の伝道に大をなしたのであった。

1582年には日本最初の遣欧使節である4名の少年使節がイエズス会の支援のもとに訪欧する。彼らはローマに至り、法王に会見するなど日欧友好の歴史的1ページを築く⁸⁾。しかしその後不幸にして長いキリシタン禁制の世を迎

える。キリスト教に理解のあつた織田信長や大内義隆が凶刃に倒れたのがその発端であつた。キリシタン禁制の出来事は深く日本の宣教の歴史に陰を落とすこととなつて、今日でもその影響なしとしない。しかし、1999年にはザビエル来朝450年の祝賀行事が行われたように、ポルトガル人の日本語に与えた多大の影響⁸⁾も記念されねばならない。

文献

- 1) (1987) 聖書新共同訳、序文、日本聖書協会（東京）
- 2) (1603) Vocabulario da Lingoa de Iapam, 日本イエズス会（長崎）
- 3) (1980) 邦訳日葡辞書、岩波書店（東京）
- 4) (1992) The American Heritage Dictionary of English Language, Houghton Mifflin Co (Boston)
- 5) 新谷光二 (1996) ; 「唇の謎恋の架け橋」、p.60、共同文化社（札幌）
- 6) 克美・タテノクラハト (2000) ; 「日本語になったクリスマス」言語、12月号、p.2、大修館（東京）
- 7) (1988) 日本キリスト教歴史大辞典、教文館（東京）
- 8) M. アルヴァレス他著、金七紀男他訳 (1992) ; 「ポルトガル日本交流史」、彩流社（東京）